

日本ナイル・エチオピア学会設立によせて

河合雅雄

「ナイルはエジプトの母である」とはヘロドトスの名言である。そのナイル川によって、ホモ・サピエンスの最古の文明が生み出された。ナイル川は大きく白ナイルと青ナイルに分かれるが、白ナイルははるか南のアフリカ中央部にあるビクトリア湖から発し、青ナイルはエチオピアのタナ湖が源流である。エチオピアは紀元前から王国を作り、4世紀に伝播したキリスト教を中心に独自の文化を育み、紅海を通じてアラビア半島とは古来から深い関係を持続しながら今に至っている。また、農耕文化についても、ナイル川流域とエチオピア高原は、コーヒー、テフ、エンセーテなどの多くの栽培植物の起源地として強い注目をあびてきた。牧畜文化に関しても、スーダン、エチオピア、ケニアの国境周辺には、ナイロート系の諸民族が今なお伝統的な生業形態を維持しており、ナイロート文化の原郷として魅惑に満ちた地域を保っている。

一方、アナトリア高原に発するといわれる大地溝帯は、アフリカにおいてはエチオピアの紅海側を起点として、ケニア、ウガンダ、タンザニアを経て南下するが、ここにはアウストラロピテクス類をはじめとする人類発祥の地として知られ、豊富な霊長類の化石とともに、人類進化の研究には世界最大の舞台が用意されている。また、この地方には4種のヒヒ類が生息しているが、中でもゲラダヒヒはエチオピアだけに、マントヒヒはアラビア半島とエチオピアだけに生息し、ザンジバル島とケニアのタナ川にすむマンガベイヤコロボスの固有種など、霊長類研究の宝庫となっている。霊長類だけではなく、哺乳類や鳥類、その他の動物相も豊富で多くの固有種を含み、生態研究や生物地理学的研究にとっての重要な地域である。

本学会が対象とする地域は、砂漠、サバンナ、熱帯林、高原、高山、それに豊富な湖沼と水系に

恵まれており、多様な自然に培われた多彩な文化を开花し、自然・人・文化を統合した一大文化圏を形成してきた。そしてまた、この地は長距離交易を通じて古くからアフリカとアジアをつなぐ拠点として、二つの大陸をつなぐ重要な文化的掛橋の役割を果たしてきた。

従来、アフリカ、エジプト、中近東の研究にはそれぞれの学会や友好協会があり、蓄積された諸研究は成熟の段階に達している。これらの学会のネットワークと諸成果の総合化が、今強く求められる時期に至ったと思われる。本学会はまさにその役割を担うという意気込みの下に設立された。

本学会は複数の地域研究の総合化を目指しているので、さまざまな分野を含んでいる。最近国連環境会議でバイオダイバーシティが取り上げられているが、地域研究は自然・人・文化がつむぎだす多彩で包括的なダイバーシティの研究であって、地球科学、生物学、農学、言語、歴史、芸術、宗教に至るまで、総ての学問分野を研究対象とし、この地域をより深く掘り下げて適切な認識を人類史に位置づけ、世界に提示していこうとするものである。

この認識に立って、若手と中堅研究者の自発的で積極的な呼びかけに応じ、多数の賛同者をえて本学会の発足に至ったのはまことにうれしくかつ有意義なことである。幸い三笠宮崇仁親王殿下をはじめ、関連諸学会の中心的人々の快諾をえて顧問に迎えることができた。また、共英製鋼株式会社社長高島浩一氏より多額の寄付金を頂き、学会の財政的基盤が確立したのはまことに幸運であった。これらの諸氏の温かい御支援に対して心から御礼を申し上げますと共に、本学会の清心で力強い発展を期待したい。

〔かわい まさお

日本ナイル・エチオピア学会会長〕